2020年3月15日　中原キリスト教会

**「コラたちの反逆」**

聖書箇所：民数記16:1-35

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は、民数記の中のコラたちがモーセとアロンに反逆したところの記事から信仰についてメッセージを得たいと思います。かなり長い個所を読んでいただきましたが、全体の話が頭に入りにくい、と思いますので、まずこの個所の概略をご説明することから始めます。

出エジプトのイスラエルの民は、十戒をいただいたシナイ山から、カナンの地に向かい荒野の地カデシ・バルネアにつきました。そこから、モーセは斥候を派遣し、カナンの地を調査しました。斥候隊が戻って言うには、“カナンの地は大変良い土地柄だけれど、そこの住民は大変強そうなので、侵入するのは無理”というものでした。これに対し、神の怒りが向けられ、カナンの地には入ることができなくなり、四十年の荒野の旅が運命づけられることとなりました。そして、その間、守らなければならない主なる神への捧げものが定められました。そして、再び、カナンの地を目指し荒野の旅をしなければならない、その苦難の時にこの事件が起きました。

イスラエルの民のなかでレビ族のコラという族長とルベン族のダダンとアビラム、およびオンという族長がモーセとアロンに反逆し、モーセとアロンがこの民を指導している限りこの地を動かない、と宣言しました。特に、コラはモーセ、アロンとともにレビ族という祭司の職に定められた特別な部族の一員でした。モーセ、アロンはこれに怒り、どちらが主なる神の意志に添っているのか、はっきりさせよう、と言います。コラは他に250人の族長たちをも味方にしていました。モーセはコラに「火皿をもって、火を入れて、香をたき、会見の幕屋の前に立て」と言います。いくつかのことが起きますが最終的に「彼らの下の地面が割れ、彼らは生きながらよみに下り、彼らは滅び去った」のです。そして彼らに味方した250人は「主のところから火が出て、焼き尽くされた」と言われています。

全体のストーリはこのようなものですが、随所に我々へのメッセージが語られています。まず、この反逆をした人間たちです。実質的なリーダーはレビ族のコラです。彼はモーセ、アロンの父の兄弟イツハルの子ですから、モーセ等のいとこになります。レビ族は特別な部族ですから、このようにモーセ、アロンに反旗を翻すことは考えられなかったことです。レビ族はケルション族、コハテ族、メラリ族によって構成され、コハテ族は更にアムラム族とイツハル族に分かれます。モーセ、アロンはアムラム族であり、コラはイツハル族です。イツハル族は祭儀の道具を運ぶ役割を与えられており、天幕に入ることのできる祭司はアムラム族のアロンでした。祭司職に対する妬みがこの反逆の背後にあったと思われます。そして、コラたちは、最終的には主なる神の怒りにふれ、破滅することになります。しかし、民数記26:10-11には「すなわち火が二百五十人の男を食い尽くした。こうして彼らは警告のしるしとなった。しかしコラの子たちは死ななかった。」と記されています。コラの子らですでに独立して家庭を持っていたものたちは破滅をのがれたのです。3人の男の子がいます。そのコラの子らは詩編の前書きのところに登場しています。詩編42:1には「指揮者のために。コラの子たちのマスキール 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、 神よ。私のたましいは、あなたを慕いあえぎます。」とあります。マスキールというのは「教えの歌」の意味です。コラの子らがこの有名な詩編を歌ったのです。即ち、コラは神により滅ぼされましたが、コラの子らについてはこのようなイスラエルの歴史に残る働きが認められているのです。

コラと共に反逆したのはルベン族の人々です。ダタンとアビラムです。ルベン族はイスラエル十二部族のなかでは長男の系譜に属する部族です。ルベンは創世記で、父の床を汚したとことで長子の特別な地位を外されました。父アブラハムのそばめビルハと寝た、のです。それ以降、ルベン族は長子の系譜からはずされ、代わって、ヨセフ一族が十二部族の長のような存在になります。したがって、ルベン一族にはイスラエル指導層への不満が根本にあったのであろう、と推測されます。しかし、注意すべき点が一点あります。16:1では反逆したルベン族の中にもう一人「ペレテの子オン」が挙げられています。しかし、このオンはその後、全く、名前は出てきません。おそらく、気が変わり反逆の群れからはずれたものと考えられます。彼の名前オンはエジプトの有名な町オンと同じつづりです。太陽神崇拝の中心都市です。ヨセフの妻アセナテの父はオンの町の祭司であった、とされています。もしかしたら、ルベン族のオンも太陽神崇拝者だったのかもしれません。

彼らは、モーセ、アロンに対し「あなたがたは分を越えている。全会衆残らず聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは、主の集会の上に立つのか。」と非難しました。イスラエルの全会衆残らず聖なる者、というもっともらしい理由をつけてモーセ、アロンがイスラエルの民の上に立っている、と非難したのです。反逆者は常に屁理屈を付けます。言っていること自身は、表面上は、全く正しいのですが、民衆には指導者が必要なので主なる神の選びによってモーセ、アロンが指導者となったのです。それを、彼らは、イスラエル全民衆は平等だから、それを支配する指導者は認められない、といったのです。この魂胆は明らかです。自分たちが、モーセ、アロンに代わりたい、からです。彼らには、主なる神の選びがありません。似たような状態に我々が置かれる場合もあります。神の選びによる指導者とはだれなのか、ということです。一般民衆には判断が付きかねることです。しかし、部族のリーダーや祭司たちは、主なる神の言葉を語っているのがだれなのかはわかっているはずです。この場面で私たちはどこにいるでしょうか。胸に手を当てて考える必要があります。それは主イエスの十字架の場面で私たちはどこに居たかを、を考えることでもあります。

モーセ、アロンは神の前で決着をつけよう、としました。コラとその仲間すべてに対し、「あしたの朝、主は、だれがご自分のものか、だれが聖なるものかをお示しになり、その者をご自分に近づけられる。---あなたがたは火皿を取り、あす、主の前でその中に火を入れ、その上に香を盛りなさい。」と指示しました。更に、レビ族の者に対しては「イスラエルの神が、あなたがたを、イスラエルの会衆から分けて、主の幕屋の奉仕をするために、また会衆の前に立って彼らに 仕えるために、みもとに近づけてくださったのだ。---それなのに、あなたがたは祭司の職まで要求するのか。」と言っています。ここで「祭司」と言っているのは祭司のリーダー格の大祭司のことです。主イエスの時代にはこの大祭司がユダヤ民族の宗教的・政治的指導者とされ、主イエスを十字架につけた主たる責任がある人物です。モーセ、アロンはコラたちがイスラエルの民の指導者になろうとしていることを見抜いていたのです。

コラたちの反逆ののろし、とモーセ、アロンの反論の間に短い言葉があります。16:4です「モーセはこれを聞いてひれ伏した。」という言葉です。同じ言葉が14:5にもあります。「そこで、モーセとアロンは、イスラエル人の会衆の全集会の集まっている前でひれ伏した。」とあります。これは斥候を派遣したのだけれど、とてもカナンの地に入ることなどできない、と報告した時、民衆が「エジプトに帰ろう」と言い出した時のことです。民のつぶやき、反逆を、自分たちの罪として、神の前に懺悔し祈っている、のです。指導的な立場の人間は民衆の罪を自らの罪とし、神に赦しを請う、義務と責任を持っている、と言うことなのです。聖書は指導者の責任を非常に大きくしているとともに、民衆は、指導者の導きに従うこと強く求めています。これは対になっているのです。

モーセはルベン族の反逆者にもこれに参加するように言いましたが、彼らは拒否しました。その言い分はモーセ、アロンを責めるものでした。「あなたが私たちを乳と蜜の流れる地から上らせて、荒野で私たちを死なせようとし、そのうえ、あなたは私たちを支配しようとして君臨している。---しかも、あなたは、乳と蜜の流れる地に私たちを連れても行かず、畑とぶどう畑を受け継ぐべき財産として私たちに与えてもいない。あなたは、この人たちの目をくらまそうとするのか」というのです。モーセは激しく怒り、主なる神に「どうか、彼らのささげ物を顧みないでください。」と祈りました。これは主なる神の恵みが一切彼らから取り去られるように、という祈りです。非常に激しい呪いの言葉である、と言ってもよいと思います。ここのところは主イエスとモーセの差を明確に示しています。この差は、両者の間に横たわる、千数百年のイスラエルの歴史が「イスラエルの救い」はいかに成し遂げられるのか、の差として示されています。その意味では、モーセの言葉を私たちは批判的に見なければならないこともあります。しかし、人間の次元ではこの呪いともいえる言葉を吐きたくなるのは私たちの現実です。主イエスはそれもご存じです。おそらく、主イエスへの個人的祈りの中では、そのような呪いの言葉も許されているのではないか、と思います。

コラの仲間はモーセ、アロンに言われた通り、火皿に香をたいて会見の天幕の前にきました。そしてあろうことか、再度、民衆をモーセ、アロンに反逆させようと先導しました。モーセはアロンも同様の火皿を持つように言いました。すると、「主の栄光が全会衆に現れた」と言われています。神顕現です。神の全能の力が示される時です。この場面においては、反逆者を含むイスラエルの民の破滅です。ここでモーセ、アロンは伏して祈り、「神。すべての肉なるもののいのちの神よ。ひとりの者が罪を犯せば、全会衆をお怒りになるのですか。」という言葉を発しています。主なる神に対し、「一部の反逆者がいるからと言って、全イスラエルが滅ぼされるのですか」という疑問を呈し、正しい人々を裁きから外してください、と言っています。この個所は創世記においてソドムとゴモラの町が滅ぼされようとしたとき、少数でも正しい人がいるのに神はこれらの年を滅ぼされるのですか、という疑問を神に投げかけたアブラハムの話が思い起こされます。この場面では「神の思い直し」がテーマです。神の怒りはとりなしの祈りにより、納められることがある、ということです。この民数記の場面でも、コラ等の反逆により神の怒りが最高潮に達し、イスラエルの民全部が破滅させられそうなとき、モーセ、アロンは一部の反逆者のために全イスラエルが滅ぼされる、ということが起こって良いのでしょうか、と主なる神に疑問を提示しているのです。モーセ、アロンは最後まで罪なき民衆を救おう、とされたのです。その責めを自分たちが負う、ということが含まれています。このことが、モーセが最後に約束の地に入ることができない、という裁きに通じているのです。主は、この反逆に加担した者のみに罰を限定します。この指導者の罪と共同体の罪の問題は旧約聖書を通して繰り返し示される問題です。

これを受けてモーセはコラたち反逆者の仲間、ルベン族の反逆者たちから離れるように民衆に言います。そしてモーセは“これら反逆者たちがすべての人間が通常死ぬように死んだのなら私は神から遣わされたのではない。もし、これらの者が、これまで見られないように、生きたままよみに下るなら、これらの者は主を侮ったことになる”と宣言しました。その瞬間、コラの仲間たちのところで、「彼らの下の地面が割れた」と言われています。突如、地割れがおきて、その間に反逆者たちは飲み込まれていった、ということです。イスラエルの民衆は逃げました。ルベン族の反逆者たちについては「また、主のところから火が出て、香をささげていた二百五十人を焼き尽くした。」とあります。

この物語は、表面的には、モーセ、アロンとコラたち、反逆の指導者の争いに見えますが、イスラエルの一般民衆はどちらに味方したのでしょう。これはこの物語の後（あと）の16:41「その翌日、イスラエル人の全会衆は、モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。「あなたがたは主の民を殺した」、この言葉ではっきりしています。民衆はコラたちの見方だったのです。そのため、モーセ、アロンは民の罪を自ら負わなければならない状況に追い込まれたのです。彼らが「ひれ伏した」のはそのためです。コラたちだけ一部の者の反逆であれば、大した問題ではないでしょうが、実は民衆が心情的にその味方になっていたのです。希望が見えない状況の中での不満がそうさせたのでしょう。その民衆の罪を赦してください、と祈ったモーセ、アロンはその罪の罰を自分が引き受けることになったのです。そしてこの民の罪を負い自らの命をもって贖いの供え物とした人を私たちは知っています。このモーセ、アロンの姿勢、そしてイザヤ書53章の「苦難の僕」、そして、主イエスの十字架は底流において繋がっているのです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のこのひと時を感謝いたします。今日はコラたちの反逆の個所からいくつかのことを学びました。コラたちが神の選びの指導者モーセ、アロンに反逆した時、大部分の民がコラの方を支持しました。その中にいる私たちを見るものです。また、その反逆にもかかわらず、そのコラは神の恵みの下で生きていくことが許されています。更には、指導者は民の罪を自ら引き受けることが求められている、ことも知りました。私たちの主イエスの御業の原型がモーセのなかに現れているのです。私たちに悔い改めの心を起こさしめてください。主イエスの歩みに倣う者とさせてください。主の御名により祈ります。アーメン）